



中村俊定文庫
文庫 18
646





夏孟子論序



林与三
横
三
西

小冊成ぬ客来て曰此名いふは孟子辨
利よく諭とくは是誠能諧の利口諷諫
奇この義を予笑て不答とめて問いよく世
話よんを和食のくはるもやん理屈れが
ゆりてくも度とらん能諧ハナ理屈と強ひる
理よゆゆ物也我ハナ夏れけいゆのま子中云
車也門あの特賣海石ふこと何童幼も
合意とて一作意と詩歌とくくかして

其詞と奴婢のこゝに遠ひて志うも可
 詩おふそけかゝり得道同悟の程も近
 々若詩おふれれり何にかゝれ俳諧
 高ふ人の紫馬極りし先にも今我も
 多うとふて嘯くうとふくハ予々嘯く
 ッウウと嘯くうとふくハ予々嘯く
 一陳乃風来く猛虎一聲山月高

干時寛政二龍成れミ仲呂

累日菴活道耳素丸よ代りて

書



春之部

山独活や義仲よの侍りて
 古庭にぬららるるやと川橋
 千之布のかまろ白いわきれを
 履よの、妻よハ手ふる花見か
 垣紙一小むく、鏡の白かりたる
 まる雨てきり流ふ日れ長さうけ
 ちやハ一乃や日と鏡のこす針の先
 海棠や雪白、顔と回一照
 一麻入るる、保生の小治小

素孝
 飄斎
 素暁
 素珪
 逸雅
 素雲
 素峯
 如流
 其釣

房列

白ふ車万里路やまれ月
 川春のぬれ價もかえりん
 せうんもかりんまふ極り相
 相生れ年代のかまき石の美
 まさ一洲ありさあ芦の角
 死くくや二千坊れ飯けり
 ゆくまきくあまきつま一棟
 鴨の葉小致も同詩や蚕柵
 人満れ玉波おーくふくら
 津くくくく石濡くまれぬ
 連佐
 白基
 百之
 雅淵
 蛙水
 南彦
 乙州
 扇波
 百九
 泰柳

まくきだあ吹やあ川啼鐘
 牛の舌切とうとう長宗子
 雪掃し摘はぬ月けり子哉
 二三度と時を同くりまれ白
 糸りのハ路くゆきも臆月
 草履くくくくく白松れ花
 さくらり人いらりもぬ柳ふ
 梅のくおまき白濁してまき
 極り那ーと世は花河つめても
 さく塔ハ旅り叫きく物め糸揃が
 芳舎
 芦鳥
 桃丸
 全
 全
 芳舎
 風佐
 帛川
 素水
 虎嵐

秋風の雨の中を眺めて之れは女が
 帰るぬほく美しく心ゆく
 涅槃會やふの日致一ツ蠅一ツ
 兼好と浮き入りしと山極
 もれ葉やもゆる事とぬ(叶
 我丁息小羅とて旅子れ目録
 出代やあいのみれ人々泣
 山かつて肉入るも極りぬ
 沖小田の極は染白沙手持
 うくも元山菊の岩根も

三

桃丸
 全
 素麻
 素木
 木子風
 應隆
 吾丸
 竹賀
 吏陸
 雨州

湖の雲井小はく九歳に如
 海棠ややそ二日れ月の眉
 人々ましく股をそと極り
 梅もあまもささきもささき
 二日月れ雲よくやて白雲小
 言真り陰もそのも極り
 雜々々小泉の心ゆく思ひ
 下流へ彌屋の心ゆく肌のを
 連翹やも語をゆぬ茶を
 地へ底へ音をうらうらまれぬ

蒲丈
 素湖
 宣明
 ころり
 いち
 蓮宇
 水哉
 真一
 梅曉
 布川

長ナキ

勝山

芥子行てさくさくしれ雨きよ入ふ人の
 古刀音と僧正坊の心付く
 心い麻れ糸よきしりぬの籠子
 わらぬの極小きつるふきやね
 あり中ふちとあつさ小籠う子
 鶴く口日和お籠ふてあれ上
 海棠や六十帖ぬかふれ庭
 雨のりを福柱かふふ田隈う子
 眼息干眠は強てしきまき
 園れちと捨くさく度り啼種

素人

馬喬

幸来

葡萄露

桃丸

其丸

素山

素天

車照

買凡

竹田くもとくけ後さくや
 胡葱や刺ふくた思以叶
 ちやうくくま実アくく福之像
 見りくこの一度ふ古く山く
 ちぬれ舞わくもて扇のぼく
 ねりうくく波才さくられ小松原
 春ふりくた塙とくくかまを
 陽あくく杯りく若先よりく
 白備くく心旅子れ欲く
 匠汁くく感わくく柳

越前

三葛

越後

武陵

布川

無的

平賀

素甲

上毛

烏光

朝方

専車

浦架

梅之

浦架

雪旭

浦架

素柏

浦架

杞柳

江翁ふもは平の蓮や海ひのな

州来らふは海あはれまへ八重橋

中くはるや南海道れ這入口

心更へく挽き心してゆきまは

鶴くき梅あぬれ中れはるまは

かきうはや二回くはるまは

救入の二軒ハ曾我よきまは

耳かゆまは麻足まはるまは

梢くまは清いまはるまは

ふみ餅やめくちれ小野と膳れ上

野逸

三列
了意

徳布

蓑夕

風旭

歌童

風声

来二

亘梁

里東

系ゆふ小唐の腹るる日和うの

しきく逆簪子鼓ふ相つふい

雪解やうきひけりお水の泡

はちめは風れぬきや腕自

わく州やふと屏風の墓餅

初うらぬ風れぬきよ木の芽うら

陽あはれ細くきくよ木の芽お

牛の宵れ毛並をきくよ柳うら

灌佛や日と指ひきくよ一川

振替くは小船れ舞や川さる

湖友

沼里

鹿尾

柱童

免川

田鷺

吟谷

野行

兎石

素柏

元名

ウラカ

春もや弁も物へ二ふ落
 梅も多や心さうりれ酒根紙く
 連翹を朝りりあの流れさうな
 雨系むつ痒ぢふあめめり山
 比三州や一人きあふ九も松
 古板も半紙しむいさめ芽小
 とけい午や籟のま形のなま
 山とまあこ只のやううこり
 山法州のそやのりれまふふ
 夕重葎がつふや富士の砂をり
 東行
 春虹
 青房
 仙里
 全
 秀珍
 全潮
 燕志
 全
 文呂

ねもーちき夢んく度り極うれ
 宇敷さうく梢もさうぬ獲存
 其風や浪吹あうう魚松店
 灌佛子蟄は流うとくちちり
 作向く砂流うりあさふひさうか
 雪とけれきや林麻の山かろー
 まし神やむやうと扱た瓦て窓
 走り帆ふもさかきーさかすまか
 帰れ鳥居一羽りのを長なり
 きんゆくと浴せくはる柳る
 三上
 時人
 夙化
 三上
 満雅
 梅市
 龜勢
 素流
 吾泉
 不二研

枚く平カと入く梅咲ぬ
 雪とけ小山の腰筋ふれうらり
 雪ふれあふ深草や水辺乃色
 作白とやうお花のりう海を雀
 永きりやうう常とけうらり
 証てもと二王のさやや涅槃像
 花は消く地お入教のこも小
 天地人丸ううう紀波屋うら
 已うさゆ花お細てや首角
 すがりうぬ石と根人や桃一本
 子光 信阿 桃丸 素川 鴉墨 文雅 全 東吹 素融 曇二

引くてふふれ中や地は下小
 僧正の各も口まけて梅う柳
 おほりおとそふはく稱て梅うな
 梅う香やお愛のこもう後て毛
 雪ふれ小都もやうも葉摘
 且る雨や柳もふ花う麻の角
 う餅や又まれう川 死さうり
 一とけけ注連も張るこもな小
 登りつて奥一き拍白魚うら
 さゆく他他人平すれて鄭一叔
 桂栗 澁水 谷水 餘梁 素菴 全 逸窓 全 萱阿 梅徳

女房子刀さくせく見くる
 白梅や常れるるまきまき
 湯あられ中かくもゆる藤の如
 濡さうら池のせち柳一柳一
 世はくろい伊達にかるる様うら
 岩壁に常れ果の山葵うら
 山吹やぬり道長うら帯世端
 ぬくるれい水とみよりまの風
 弁の秋ぶふらも老ふうら
 中くふあてねと痛極うら

我泉
 鯨二
 素角
 宗壽
 徳布
 蘭蝶
 子光
 素丸
 全
 宗瑞

翁P... 白と浅き砂川の
 ちくちく... 流るる
 別き弱き鈍き細き...
 かり今口息の勝負の...
 是れのみきゆへ...
 万きと事...

歌仙 一座

和くもあきく名砂川の走り外
 ころ紫子向ふ眼まくれ山
 致はりしと齡 野ふ毒少し
 さくさくくと溪のほれり

溜濱菴
 素丸
 我泉
 徳布
 素麻

おりきりのふらん有と肩れ内
 子光
 由海まぬされるの智るる
 竹賀
 仇口をぬ挽く同の海らうー
 扇波
 屯宕祈るも只ゆらぬ法
 桃丸
 稽古場も流るまはの移るく小
 時人
 ときらすら白ふ夏乃わ人物
 素暁
 月おても暑され板ぬりぬ昌也
 馬喬
 勝りれ後よりて己能り
 素夕
 下書の手書きとるをこくへん
 宗壽
 粥うと果ぬちの煤標
 素川

披しして中々あふ葉ふも横
 素珪
 百その湾り行の怪とほし
 瓜化
 ぬらやうと昔ぬれ葉の雲
 鮭水
 巖とてひて鑑蝶とぬふ
 白基
 春はふ船く東坡の賦を浦し
 鹿
 人同あ車一酒く活る
 丸
 三葉まくもわね行のいふ
 賀
 急のぬへお終ぬどうき
 桃
 思學も白くえ雲の流ん止
 人
 角虫のりふ牛の年察
 布

聾小や海口とてくまに下り家

若くははり世の別く母

津とぬいほき骨く所分るのれ

支度も月入りけ踊うれ

咲ゆ秋七種の 七小町

じー探さくも花のさゆく

川苗とゆく去くこと居ま外

ね着る手腕嗅れ移り安ま

小童れあさう口とくと所分りて

系よ四うの流めとされおく

+

水 化 壽 基 注 曉 扇 川 光 夕

代々流く多れ世を雨れ居

古風と持ぬ弁く学

鳥 泉

秋仙つたの名目翁より津之濱へ後
し秘書小世より人数の分限のり月之知
して世の流るるの世分れりてか
秋影子れ篇より世へささ

夏之各詠

探出の筆意もよへ川と竹

山外より彩色く夏風立

女 飛 遊

下戸りぬ人れ花に初松奥
 茅々として筑戸の鐫れ田植り
 けりつらうい水際よりわハ文字
 禁すく送うてくれよ宗古も
 日盛ると盗々わつてをくまう
 麦秋や燕のあつた女童
 節の歌の伽藍尖まぬ雨古も
 銀扇う光とく川も牡丹外
 夏草のや流る勢あたまき地草坊
 子規りくや麻衣の丁子風呂

素孝
 素曉
 素珪
 素峰
 蓮佐
 素雲
 如流
 白基
 蛙水

蜻蛉れ出洲へく内を蘭う
 櫻く簫の声わり 桐強并
 世の中への給小せけて牡丹外
 廣庭小魂系糸 牡丹の外
 寺ゆりく鐘すへり雲の峰
 大切か物見へぬ日狂暑さこ外
 牧方う淀を雨夜に時鳥
 二葉くく名地も川蓼や佛生舎
 卯れむふたまうしんて明より
 餘の花れ盡きくく牡丹外

謙堂
 蘭袴
 乙州
 範路
 蘭蝶
 野松
 桃丸
 全
 全
 糸カベ
 帛川

五月雨やを迎く或る遠くなり
 糸梅やいじりの夢に花多川
 いと葉翳る月小春に花移り
 月れ出河かみら影る花梅舟が
 麦秋や盤三寸か 糸筥 葵
 解りて月入りぬ夏夕
 花に冠をせしや 杜若
 月の糸あつたの栗や保くさ
 柳より疾癢絶く衣う
 蟬かくや柳ういじり合歡眠り

芳全
 全
 芦鳥
 桃丸
 全
 素川
 素木
 我笑
 李凡
 素麻

新體や月代かゝる腰白
 因寺(果多)納ん弁婦人
 昼影や骨の是れは洗ま
 夕立く常かき土れ白ひの如
 竜田姫くくをそとを社よ
 灌佛や八百屋使のハ子度
 紫梅や外のよ茶と 治り合
 富士ニツ風如細工やまの早
 力多衣の幅も多し異る
 大若らちやをぬてんきく牡丹小

蕉隆
 竹賀
 吾丸
 雨州
 吏陸
 蒲丈
 素湖
 女
 女
 いち
 超阿

夕々れと木の九段やほくま
 海京とくまのくまのくまのくま
 涼しくれ底はく門や夏の月
 周く釘おの貴船の郭の
 畔望くけくふ浮雲の星所を
 舟はくけの重なりは暑く南
 ほくくまのくまのくまのくま
 去くおのくまのくまのくま
 秋風くまのくまのくまのくま
 茶梅や鐘の沈くくまの今日
 素柏

我々袖の翅くまのくま 夜く
 道くくく水室れ流と汲りく
 障れおのくまのくまのくま
 飯盛くくく華や車加路垣
 舟小波くくく心太
 後まやん定めぬくまの
 くまのくまのくまのくまのくま
 夏くまのくまのくまのくま
 くまのくまのくまのくまのくま
 満くれおのくまのくまのくま
 末角

菅車
 真一
 素柏
 杞標
 東行
 春虹
 壽鶴
 松葉
 全
 末角

弁れ子と秋遊の姿とあはれ
もすべし少尉さうりも物ふ
岸や行とくくわくくわの垢
物もと秋をほくはるはる水
初よりと使は細の拾う非
文々よりこくくわくくわの
二川より既とせぬ虫う非
雲れ早も所業院舟のみく
夕云や六寺化うれ推、本
とくくく井や世のあきくくく

古

素只
馬喬
卒来
竺蘭
菊露
桃丸
燕志
全
文呂
岑研

雨れ音止時月くくく鳥う非
相着見まはは麻の心く更衣
切く洋く路くくくくくく
今朝見まはは皆得解くくく
子親水の面白まはくくく
岸や銚火骨厚くくくく
懐く風のまゆゆか拾う非
妻の秋水時名まは日和く
嗚くくくく男れくくくく
通函を以中涼くくく

時人
風化
暗缸
文雅
鴉墨
滿雅
鳳声
来二
哥童
鳳旭

昼寐しと画も清きう蟬因由
 一茶 森谷
 以ん古も至世満の山路うれ
 一茶
 松うさへまきまきや雨さるる
 里東
 吸控て船の時も岩も夏もま
 湖友
 蟬のあつた紫れを氣乾きう
 泊里
 金山れ洞ふまはる昔乃兼
 桂童
 夕多や垣よりうらむ合親れむ
 鬼川
 吉日れももて羽織うら
 野行
 不盡うこハ憂曇を花不抽う
 鳥光
 都うハまきまらふ小あり不 特色
 無的

了れ遠ふ新稲書や初松魚
 簑夕
 蓮乃葉うす中い魚やも程
 田路鳥
 月一眼と流しゆく新秋も小
 徳布
 涼一とや風の勝れや婦人
 鹿尾
 一もまきまき息のくらまや雲の味
 吟谷
 教の中一文字不読や蓮の花
 児石
 暗さうらうらま業する新舟小
 東吹
 夕まは音と走りや弁尾
 今
 伽羅殿う魂のうら竹婦人
 素甲
 涼一とや月れ氷の解りよ
 曇二

寐冷して水の氷や亦婦人
 ねり紫袖くまらぬ年多
 深居して風情こころ牡丹小
 夕立のたらしまらねて流るる
 昼魚や小もくも古く乾く内
 唐うらと柱くぬて千婦人
 吾干と瓢と放くも鶴、な
 帰るゆきわらる風吹く涼、如
 かくし所と今別力やまらぬ
 冷くゆら乃をくくりぬ涼、小

素融
 専車
 野叟
 全
 梅徳
 三萬
 馬泉
 桃丸
 素瑞
 全

隙、歩く葉の白く雲の如
 志すいひおとけ方振りて今年竹
 童幼をまゝて夏やうう田植うま
 官小橋と入るう堂れり清う如
 今明く書あれはあわらんあま
 氣とられて更うまう子幾
 筆や爰う吹かぬ朝のあ
 まるるれ福徳足して田植うま
 滝のまをぬくも紫のう日うま
 山門の棟と残してうまうま

如水
 全
 野乃
 全
 鯉泉
 買風
 野逸
 虎嵐
 梅之
 雪旭

夕立や洗ひ半し暮れ月
 留り守れまきり家古鳥
 駕の戸小乳房の是少ぬ星も
 山ぬれ汗や流りて苔漬も
 河~~~~~や小池あり塔冷し
 隙研ひぬ法し存りて流水も
 脂後ら杉のまきとや輝れ雲
 日~~~~~と岩積よ~~~~~如吹
 小湯白下此の巻掃く南天花
 二室~~~~尾鱧のわぬ分稼うま

素水 全
 不二洞
 程ヶ谷 竹師月
 カナ川 豊野
 谷水
 素雀
 全

麦秋や一筋馬鹿 通り道
 ありまきり~~~~吹らるる菫も
 夕立や底のぬるる秋の川
 名のとれとけまきり~~~~田舎も
 張紙や月や心ゆ~~~~つぼみ
 懐~~~~や夏れ月
 夕~~~~と~~~~も~~~~と~~~~糸
 油氣の~~~~と~~~~蓮の花
 沖鶴船~~~~扇か~~~~と~~~~糸
 白漏の補~~~~流葉や~~~~軒牛

餘梁
 素角
 瓢花
 栄我
 鯨二
 扇波
 我泉
 篁阿
 石漱
 蓬剣

大石小見せむら朝のま回し子	子光
信若くく雲井の鳥れかゝり如	信阿
床心の櫛面白く竹丸月	素夕
まきと鴻の夢さきは蚊帳か	宗齋
こつれ猿ぞ少んでいさゝ安布か	惠秀
日くさくは秋の江也かよみ	全
お卯木崩の凡そくくめか	道耳
大石ふくく一蝕りりて夕立る	素丸
冷くんと水とささくくや夏れ月	野逸

跋

又酔と破し中しりりりり勿論ありて
 甘きも苦きも五味者自を紙
 重なるもの俳諧の虚實あり
 加て豆腐の厚しきちり昆蕪の
 裡計りし者今日本和曲節
 かしらあつた不道化也わくくを
 羊姑養ふ家れてん物ら小ぶささか
 うわ迎はる文字わく人きく人漢
 字古更見ぬ雲井れ鳴らんま

十五
 ちよとてふはうと多し時勢は流れて
 ちよとてふはうと多し時勢は流れて
 一は車一は馬と志わく好まはま
 一は生者一は古史と志わく好まはま
 一は心一は意と序の傍とては
 味へくして此集の清きことを
 夷別より秋顔子の撰のりては
 もれ終りて又た終りつては
 合とて家りては授泰心以超
 北海の岸とては
 下

かゝる筆跡執ふ而し

ひひ

絢堂主人誌



林
林
林
林
林

林
住
三
石
雨

